

『魏志』倭人伝の2008文字が記す

邪馬台国への路として朝鮮半島と日本本土を結び、大陸や朝鮮半島との 玄関口として国境を越えた交流と交易を行っていた一支国・対馬国 帯方郡を出発し、対馬国、一支国、末盧国、伊都国、奴国など、国々を進み、 邪馬台国に到着するまでの道のりが記された『魏志』倭人伝。 倭国を訪れた渡来人には、それぞれの国がどのように見えていたのでしょうか

コ対馬国

【原文】始度一海千余里。至対馬国。其大官曰卑狗。副曰卑奴母離 所居絶島。方可四百余里。土地山険。多深林。道路如禽鹿径。 有千余戸。良田無。食海物自活。乗船南北市糴。

【訳】はじめて海を渡るごと千余里にして対馬国に到着する。 其の大官を卑狗(ひこ)といい、副官を卑奴母離(ひな もり)という。居(お)る所は絶島。方四百余里ばかり。 土地は山険しく、深林が多く、道路は禽鹿(きんろく)の 径(こみち)のようである。千数の家があるも、良田は無く、 海物を食して自活し、船に乗って南や北と交易をして 暮らしている。



1000余里

【原文】又南渡一海千余里。名曰瀚海。至一大(支)国。官亦曰卑狗。 副曰卑奴母離。方可三百里。多竹木叢林。有三千許家。差有 田地。耕田猶不足食。亦南北市糴。

【訳】それからまた南に一海を渡ること千余里で一支国 に到着する。この海は瀚海と名づけられる。 この国の大官もまた卑狗(ひこ)、次官は卑奴母 離(ひなもり)という。広さ三百里ばかり、竹木・叢 林が多く、三千ばかりの家がある。ここはやや田地 があるが、水田を耕しても食料には足らず、やはり 南や北と交易をして暮らしている。

3 末盧国



1000余里

陸行500余里

【原文】又渡一海千余里。至末盧国。有四千余戸。 浜山海居。草木茂盛。行不見前人。好捕。 魚鰒。水無深浅。皆沈没取之。

【訳】また、一海を渡ること千余里にして、末盧国に 到着する。四千余りの家がある。山の麓の浜 で暮らしている。陸は草木が茂って、前を歩く 人の姿をみることができない。魚や鰒(あわび) を好み、海の深さに関係なく、皆、潜って獲っ



雲透遺跡から望む海の暑色

【訳】東南に百里行くと奴国に到着する。大官を 兕馬觚(しまこ)といい、副官を卑奴母離(ひ なもり)という。二万余りの家がある。

【原文】東南至奴国百里。官曰兕馬觚。

副日卑奴母離。有二方余戸。

陸行 100余里

5 奴国



台国

4 伊都国

[原文] 東南陸行五百里。到伊都国。官曰爾支。副曰泄謨觚。 柄渠觚。 有千余戸。世有王。皆統属女王国。郡使往来常所駐。(中略) 自女王国以北。特置一大率。検察諸国畏憚之。常治伊都国。

【訳】東南に陸を五百里進むと伊都国に到着する。大官を爾支(にき)といい、 副官を泄謨觚(しまこ)、柄渠觚(へきこ)という。千余りの家がある。代々 王が国を治めている。皆が女王国に属している。郡使が往来する場合、

常にこの国に滞在する。(中略) 女王国より北には、一大率を配置 する。諸国を検察している。他の国々 はこれを畏(おそ)れ憚(はばか)る。 常に伊都国に常駐している。



支国博物館

長崎県埋蔵文化財センター

http://www.iki-haku.jp/

〒811-5322 長崎県壱岐市芦辺町深江鶴亀触515番地1 TEL 0920-45-2731 FAX 0920-45-2749 ◎交通アクセス

【空港・港から博物館まで(車利用)】 ◎郷ノ浦港から20分 ◎芦辺港から20分 ◎印通寺港から10分 ◎壱岐空港から10分 【福岡・佐賀・長崎から壱岐市まで】◎博多──芦辺/高速船1時間5分・フェリー2時間10分

◎博多 郷ノ浦/高速船1時間10分・フェリー2時間25分 ◎唐津―印通寺/フェリー1時間40分 ◎長崎空港―壱岐空港/飛行機30分